

「令和 8 年度第 1 回米子市公民館運営審議会」日程

日 時 令和 8 年 8 月 7 日（金） 午前 1 0 時から

場 所 米子市明道公民館 2 階 第 1 研修室

出席者

【委員】公民館運営審議会委員

奥田委員（会長）、河本委員（副会長）、富田委員、藤谷委員、松田委員、鐘築委員、戸田委員、山下委員、湯原委員

【事務局】

地域振興課 田中課長、遠藤課長補佐、鵜籠担当課長補佐

1 開 会

2 報 告

(1) 令和 8 年度公民館事業について

公民館運営に係る課題と対応策 資料 1

（委員） 「若者の参画を本気で促すなら、土日開館へのシフトといった発想の転換が必要ではないか。何より深刻なのは館長のなり手不足だ。定年延長が進む中、直前になって『誰かいなか』と探す従来の推薦方式は限界を迎えている。候補者が自身のキャリアを整理し、地域貢献への環境を整えるためには、2～3 年前から狙いを定め、丁寧に口説き落とす長期的なアプローチこそが、有効な手立てではないか」

（委員） 公民館長の担い手不足については、1 日 3.5 時間という制限が担い手確保の壁になっているため、フルタイム勤務を含めた選択可能な制度設計を要望

○Instagram による情報発信について、○学習講座関係・○こども関連事業関係

資料 2 から 4

（事務局） 令和 8 年度においての特徴は、プログラムの「デジタル技術、現代的な学び」と「防災教育」「多世代参画の取組み」である。自習室開放は 21 館に拡大し、12 地区で展開される「居場所づくり事業」が実施された。

（委員） 「大山口列車空襲の語り継ぎ」といった平和学習を取り入れている館があるが、伝承や高齢者との交流においても必要だ。

(委員) 小中学生が夏休みに公民館で学び・遊ぶ機会が多く、学校と公民館が深く繋がる必要性を感じる。

(委員) 中学生のボランティア参加が急増しており、運動会やイベント等で小学生を指導するなど良い流れができている。地域で褒められる経験が子供たちの自信に直結している。公民館の行事で中学生が小学生を指導し、地域の大人が彼らを賞賛する。この成功体験こそが、子どもたちの自己肯定感と『地元への帰属意識』を育む。学校と公民館がCS（コミュニティ・スクール）を通じて一体化することで、地域全体が巨大な教室となっている」

(委員) 「『CHIKUWA!』やSNSの活用を、スマホにたけた若者が高齢者に教えるような逆転の発想があってもいい。デジタルは壁ではなく、世代を繋ぐ共通のテーマになり得る」

(事務局) 3Dプリンター活用や、Minecraft、ドローン教室といった先進的な試みが始まっている。また、「ユースパートナー（高校生による情報発信）」などを実施している公民館もある。

④公民館の運営について（課題整理） 資料5

(委員) 災害多発時代において、公民館は「住民が真っ先に頼る初動避難先」として重要性を増している。

(事務局) 災害の規模や種類に応じて公民館に避難所が開設されるケースがある。トイレの洋式化・バリアフリー整備も進めている。

(委員) 本年1月の能登半島地震発生時「学校が閉鎖されていたため、私の地区では15名もの子どもが公民館へ自主避難した。学校が正式な避難所になる前の自主避難所として公民館が機能する。学校と公民館が事前に連携し、避難者の動線や役割分担を地域住民と話し合っておくと良いと感じる。

(委員) 現在の館長の雇用形態である「1日3.5時間（週17.5時間）の勤務」が、定年延長時代において、60歳等で退職した現役世代に館長になってもらおうとしても、担い手を確保する上での非常に大きな制約になっている。

館長が1日フルに働けるようにするか、あるいは働く時間を自分で選べるような、時代に合わせた柔軟な制度設計に改革すべきである。

(委員) 「住民主体の活動に、公民館はどこまで踏み込んでくれるのか」

(事務局) 「公民館は『まちづくりの主体』ではない。あくまで住民の主体性を引き出し、支援し、適切なリソースへと繋ぐ役割である。『繋ぎ・調整する』という役割を明確にすることで、限られたリソースでも最大限の地域支援を実現していく」

（委員）地域が抱える課題の解決としては、館長は名誉職ではなく、地域を巻き込める『雰囲気』を作れるかどうかのプレイヤーだ。地域に思いがある館長を巻き込んで共に解決する「対話の雰囲気」づくりが重要ではないか。

⑤自治会支援アプリ CHIKUWA! について 資料6

「CHIKUWA!」の導入状況（100自治会以上の申込み）がある。

（2）公民館長の任命について（非公開）